

グローバル化時代が抱える諸問題と私の研究

～テイヤール・ド・シャルダンの思想に照らして～

上智大学大学院神学研究科 修士課程一年

佐藤 濯

<要約>

グローバル化という言葉は、様々な意味で語られる。良い意味で用いられる場合、世界の人々がより身近に感じられることや、格差の少ない社会を想定して語られる。冷戦が終結して以降、特にこの語は頻繁に用いられている。その一方、グローバル化というのは、没個性になるのではないかと指摘される。ソビエト連邦の崩壊により、経済や政治、また思想までもがアメリカ化してしまうのではないかと懸念する声も聞かれる。日本においても、英語教育早期化の問題の中で、日本の文化が薄れいくという反対意見がしばしば唱えられる。

テイヤール・ド・シャルダンの場合においても、良いグローバル化と悪いグローバル化が念頭に置かれる。彼の主張する<放散>から<収斂>へという思想は、人間が何も意識せずに、自ずと成立するものではない。もし、人間が何もせずともオメガ点へと<収斂>していくのだとすれば、私たちが語る諸々の倫理的概念は、全く無意味なものに帰されてしまう。

シャルダンの<収斂>とは、全体化のプロセスとは異なる。そこには、人間一人ひとりの重要性が強調される。倫理的な事柄を語るには、一人の人間を前提とする必要がある。戦争を経験した者にとっては、その事実は極めて重要といえる。

筆者が研究の対象としている E・レヴィナスもまた、戦争を経験し、新たな倫理学を構築した人物である。人間は、絶対的な他者との倫理的关系によってはじめて、他者と繋がりをもつことが可能になる。その倫理的关系とは、責任である。このような他者との関係において、自らの価値も浮かび上がってくる。

この論文では、良いグローバル化を築くための倫理を考察し、全体性に陥らないためには、一人ひとりの自由と責任が必要であるということを、自らの研究に即して論じていく。

はじめに

昨今はグローバル時代と言われて久しい。街を歩けば、様々な国籍の人々と極当たり前にすれ違う。

グローバル化という名称が使われはじめたのは、ここ数年の話ではない。今の大学生が生まれる前から、この語はあらゆる場面で使用されてきた。¹

そもそも、このグローバル化なるものがいつ頃起きてきたのかということを考えなくてはならない。グローバル化などと言っても、そこには多様な現象を思い浮かべることができる。それは人々の往来のみに限らず、情報がどの国でも得られるインターネットは、現代における最も顕著な例と言えるであろう。

そして、多くの人がある起源について考えを巡らせている。インターネットの普及、ラジオ放送の開始、産業革命、大航海時代と、様々な歴史的な出来事が思い浮かんでくる。悲惨な世界大戦も、グローバル化という問題がその根底にあるかもしれない。この語は、良い意味で語られることが多いが、歴史を紐解いていくと、どうもそうとは限らないらしい。²

はっきりとした起源を見出すことは難しいが、鉄道がつくられ、より安全に物や人を運べるようになったことにより、情報や文物の行き来は爆発的に増えたと言えるだろう。

しかし、これと時期を同じくして勃興したのが、帝国主義である。より安全な往来は、人々の欲望が増すきっかけになった。人間は、自分が見てきたものと違うものを見せつけられれば、多くの者がそこに興味を持つ。また進歩しているのだという錯覚をも生み出す。帝国主義なるものは、欲望の増大とともに、その勢力範囲を広めていくのである。需要と供給のバランスは崩壊し、どのくらいのもので生活に必要なかわからなくなってしまう。

このようにグローバル化が歩んできた道というものは、必ずしも良いと言えるものではなかった。事実、ナチスをはじめとする全体主義的な傾向も、グローバル化によって育まれた、利便性の高まりが大きく関わっている。³もちろん、そこにはナショナリズムなるものが存在したわけであるが、仮にそれが全体主義へのアンチテーゼだとしても、個人については無視されているという点で、

¹ 『思想読本 [8] グローバリゼーション』伊豫谷登士翁編、作品社、1992年、p. 1。

「政治学、社会学、経済学あるいは歴史学などの伝統的な学問分野だけでなく、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究あるいはエスニック研究やジェンダー研究においても、グローバリゼーションはさまざまな形で取りあげられてきた。」

² 1996年のリヨン・サミットでは、グローバル化のもたらしたマイナス面についての議論がなされた。(発展途上国の貧困や環境問題など)

³ ナチスドイツは、マスメディアが広く人々に影響を及ぼしていることに目をつけ、様々なプロパガンダを展開している。

これらは同根のものであるとも指摘できる。

さて、現代に生きるものはその功罪を考えることができるわけだが、今のところ、日毎にグローバル化の波は大きくなり続けている。悲劇的な様相を目にしたものであっても、この波が今後止むものであると考える人は、どのくらいいるだろうか。今やどんな小さな情報であっても、数秒で世界各地の人々と、それを共有することができるのである。⁴

以上のような時代状況を踏まえたうえで、二度と世界大戦のような悲劇を生み出してはならないと考え、著述を行った思想家が多数いる。様々な苦難と立ち向かいながら、命がけで将来世代のために書き記した。

その人が、テイヤール・ド・シャルダンであり、私が研究対象としているエマニュエル・レヴィナスである。両者とも、戦時中に思索を深め、後の著述活動に精を出していった。まさに、自らにその責任があり、何としてでも後世に伝えようとしたのである。

責任の思想

世界大戦を経験した思想家たちは、総じて個の喪失という危機に遭遇した。それは生命の危機といった問題に限るものではない。自分が練り上げた思想を自由に語るができない。また、何か巨大な権威機構によって、全ての行為が制限されていると感じる。フランツ・カフカの小説⁵に目を通せば、第一次世界大戦期には、このような雰囲気があったことを知ることができる。

これは歴史的にみれば、皮肉ともとれるようなものである。フランス革命を通して、少なくともヨーロッパ諸国民は、自由を享受できると考えていた。アンシャン・レジームからの解放は、あらゆる場面で人間に良い影響を与えようと思ったものだろう。これは、ヘーゲルの思想からも垣間見ることができる。イエナで世界精神たるナポレオンを目にした彼は、解放者としてこの偉大な将軍を受け入れたのである。⁶

ヘーゲルにみられる当時の風潮は、自由を求める人々が、また大きな全体を作り出すという矛盾を露呈する。そこに、キルケゴールやマルクス⁷が現れ、そ

⁴ 21世紀に入ってから、様々なSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)が開発され、世界中の人たちが容易に個人の情報を開示できるようになっている。

⁵ F・カフカ『城』前田敬作訳、新潮社、1971年、p. 626。訳者あとがきより。

「人間を社会という巨大なメカニズムのなかのたんにひとつの歯車たらしめることによって、人間を徹底的に機能化し、抽象化し、非人間化してしまった。」

⁶ この後、ヘーゲルは「世界精神 *Weltgeist* が馬に乗って通る」と語っている。

⁷ 共に1840年代から著作を発表し始め、ヘーゲルに対する反論を行っていく。両者の思想は、実存主義思想、そして共産主義思想として、後の時代に多大な影響を与えている。

れを食い止めようとするが、その世界情勢が全面的に変化するということはなかったのである。

自由という思想が、本当に私たちを自由にするのかという問題が、戦争を経験した思想家たちの共通問題となっていく。もちろん、人間は自由であるべきだが、自分の欲望だけを求めて生きようと考えれば、そこに待ち受けているのは責任の回避であり、アウシュビッツなどに見られる大量殺戮である。

実際に一人のユダヤ人として戦争を経験し、『全体主義の起原』という書を記したハンナ・アーレントは、アイヒマン裁判に際して、権力機構の前に考えることをしなくなった官僚(アイヒマン)について、明快な分析をしている。彼女によれば、この官僚はもはや人間としての思考を失い、そこに責任能力を見ることはできない。全体主義による個の喪失が、責任能力までも失わせているのである。

確かに人間というものは、思想する自由を持ち、また行為する自由を持っている。それゆえにその責任を問うこともできる。責任が消失すると同時に、人間は自由を失い、自由が消失すると同時にその責任をも失うのである。

ティヤール・ド・シャルダンにおいても、このような思想の流れを垣間見ることができる。シャルダンは進化論を受け入れたわけであるが、この進化は人間の意識の外で、何の抵抗をすることもできずに、私たちの身に起こるわけではない。

したがってわれわれの存在や精神圏の未来像を非人格的なものの側にさがし求めることは間違っている。宇宙の未来はオメガ点における高次の人格という形で考えるほかないだろう。⁸

生命は放散から収斂へと向かうものと考えているが、人間はまた常にこの間にいることを認識しなくてはならない、ということを明らかにしている。これは多様性が、人間やその他の生命によって絶対条件であるということを示す。仮にグローバル化が進もうとも、その多様性が失われてはならない。個としての人間が維持されるということが、収斂に求められる。

個を維持し、そして尚且つある一つのものへと向かうには、私たちは何に頼れば良いのだろうか。

レヴィナスの思想

⁸ ピエール・ティヤール・ド・シャルダン『現象としての人間』〔新版〕美田稔訳、2011年、みすず書房、p. 311。

レヴィナスもテイヤール・ド・シャルダンと同様、多様性なるものを強調している。「存在における多様性が全体化を拒絶する。」⁹

確固とした主体性としての個が確立してこそ、そこに責任が生じ、他なるものへの眼差しが生まれてくるのである。人間は、主体を有したものとして考えなければ、そこに自由も存在しない。レヴィナスの主張によれば、欲求と形而上学的な渴望¹⁰なるものが、それら主体のあり方を定める。

欲求は、自分の欲求を満たすために他なるものを求めるあり方と言える。この場合、欲求を持っている自己は、それを満たすために他なるものを使っているに過ぎない。関心はあくまでも自分なのである。他なるものを介在しながら、自分のことしか考えていない。

一方、渴望の方は自分の欲求から既に解放された状態にある。そこには自由な主体が確立されているため、欲に支配されてはいない。では他者というのは、ここではどのように自分と関わるのであろうか。

形而上学的な渴望は、これに対して、まったく他なるものを目ざし、絶対的に他なるものに向けられているのである。¹¹

他なるものは、ここでは形而上学的な対象として現れる。また形而上学的という語は、存在と対置して考えられている。渴望というのは、絶対に他なるものへと向けられるものであるがゆえ、そこに終着点を見出すことはできない。考える私たちは、完全にこの他なるものを捉えられないのである。

他なるものを捉える事ができないということは、自分のもとに取り込むことはできないということになる。もし、自分に帰還するようはたらきかければ、そこにはある暴力が介在しているかもしれない。しかしながら、どのような方法をいようと、他なるものを自分のものにすることはできないのである。

絶対的に<他なるもの>への渴望を、高貴さを、形而上学の次元を前提としているのである。¹²

このような分析は、存在者が存在という漠然としたものに飲み込まれるようなものでないということを明示する。相手を尊重するということは、確固たる

⁹ E・レヴィナス『全体性と無限(下)』熊野純彦訳、岩波書店、2006年、p. 81。

¹⁰ 原語では、欲求は *besoin*、欲望は *désir* と記されている。

¹¹ E・レヴィナス『全体性と無限(上)』熊野純彦訳、岩波文庫、2005年、p. 39。

¹² 同書、p. 43。

“考える私”を前提としている。¹³

レヴィナスの思想は、このような考える私と絶対たる他者が前提として考えられている。独立したこれらの存在者が無ければ、そこに倫理はない。自分の欲求の対象として他者を考えるならば、それはもはや自己の中に取り込まれてしまっているものである。

以上のようなレヴィナスの思想を、政治の諸形態に当てはめることもできるだろう。例えば、帝国主義の場合であれば、欲求という概念をもとにこれ考えることができる。

かつての帝国主義国家は、植民地の人々の雇用やその土地のインフラの整備という名目のもと、様々な政策に取り組んだ。もちろん、中には本当にこのような施策が良いものだとして行ってきた人間もいたかもしれない。しかし、この帝国主義なるものは、結局自らの欲求を満たすために執り行われる。自国の経済活動の推進と、さらなる飛躍を求め、その他の国を自らの権力に取り込もうとする。

これが経済活動だけならば、相互の協力関係を築けるのだが、かつての帝国主義は、植民地の言語をはじめとする、その地域の文化をも自国のものに吸収させようとしたのである。

まさにこのような現象は、レヴィナスのいう欲求に当てはまる。問題は、自国の利益が第一に考えられていることなのである。他者への関心はそこにはなく、文化を尊重する姿勢は極めて少なかつただろう。

今後私たちがグローバル化ということを考えるならば、歴史的な状況もしっかりと踏まえ、自らの欲求だけではそれが暴力に成り得るということを念頭に置かねばならない。

責任=倫理の可能性

他なるものを自らの欲求によって同化することは、帝国主義の発端になり得る。これを避けるために、まずそれぞれが独立したものであるということを認めなければならない。

しかしながら、私たちには様々な場面で他なるものと接する機会がある。もはや、その範囲はより広いものとなり、地球規模の事象として私たちに問いを投げかけている。グローバル化という流れは、多様な世界が共存する時にはじめて、その価値が見出される。

もし、各々が独立しており、かつまた交流もしなくてはならないとするなら

¹³ 同書、p. 46。

ば、どのように相手を蹂躪することなく、それを達成すれば良いのだろうか。

この接点となり得るのが、倫理=責任という概念である。人類は、長き間、自由を求め邁進してきた。ところが、両大戦により、その価値観は揺らいだと言える。倫理学において大きな転換があったとすれば、これ以上に大きなものはなかった。画して、自由というものが時に暴力となるということを実感したのである。

自由はもちろん、大前提として私たちのうちにある。けれども、自由を過度に求めることは、他者の自由を侵す可能性をもっている。帝国主義的支配というのは、概してこのようなものであった。

現代に生きる私たち、つまりテイヤール・ド・シャルダンが論じたような意識を有する人間は、その責任をまず考える必要がある。責任とは、他者や人間全体を考えるということに帰結する。責任という堅苦しいことを考えながら生きていけない、という考えをもつ人もいるであろう。確かにそれだけでは自分が押しつぶされてしまうということにもなりかねない。ところが人間は、他者に対する責任がなければ、自らの価値も見出せない。

多くのスポーツの場合、この理論が大きな役割を果たしている。例えば、サッカーをする際、そこにはゲームを進めるためのルールと、それぞれのポジションが与えられている。それぞれが、その役割を自分の使命の如く思い、コート内で走り回っている。各選手は、そこで自らの自由が奪われてしまったと思うのであろうか。確かに、監督に行為を制限されていれば、そこに不満があるかもしれない。しかし、そのポジションの範囲内なら動き回れるということなら、そこに責任感をもち、みずからの価値を見出すことができる。

責任を前提としない自由は、この世の中にも存在しないだろう。仮に完全な自由があったとしても、自分が何をすればいいかということを見出すことは困難である。他者との関係性がなければそのゲームは成立しない。自由であること以上に、他のプレーヤーとの関係性がなければ、自らの価値をも見失う。

このように、人間は他者を見ずに自分の自由だけを求めていけば、それは暴力になるだけでなく、自らの存在価値をも見失うことになる。過度の欲求は、絶望へと誘うのである。

よってグローバル化が進んでいき、テイヤール・ド・シャルダンが言うように、放散から収斂への途上に人間がいるとするならば、そこに責任=倫理が絶対的な条件として示される。

今後の課題

責任=倫理の分析により、人間が自由を過度に主張するということが、自らの破滅をもたらしかねないということが明らかになった。その主張が他者に対する暴力になるということも考えられる。

現代において、人間は全てにおいて価値を見いだせなくなっているのではなかろうか。あらゆる出来事は、偶然の産物として捉えられ、そこに人々への関心はますます希薄になっている。

実際、グローバル化などと言いながら、身近な隣人とさえも交流が少なくなってきた。そのような状況にあって、グローバル化するものは何の意味をもっているのだろうか。地球規模で人々の距離が短くなると考えられてきたが、さらに個人における孤独感は増しているのではなかろうか。

それに加え、経済的な側面をみても、人々の格差は広がっている。

経済協力開発機構(OECD)は2日、世界の富裕層と貧困層の格差の拡大は1820年代と同じ水準にまで悪化しているとの報告書を公表し、こうした変化は過去200年で「最も憂慮すべき」事項の1つだと警告した。

過去2世紀の世界の生活状況を調べた報告書の中でOECDは所得の不均衡が急速に拡大したのはグローバル化が進み始めた1980年代以降だと指摘している。¹⁴

このような指摘は、私たちが見てきたものとは無関係とは言えないだろう。記事が言及しているのは、経済的なグローバル化に対してのものであるが、一つのきっかけとしてこれを捉えることが可能である。

19世紀以降、人類は自由と貧困からの脱出を求め、生きてきた。フランス革命なるものは、この傾向の発端として考えることができるだろう。先述したヘーゲルも1820年代に大いに活躍した。それ以後、自由を求める人間の活動が、様々な権利を獲得したということは言うまでもない。

しかしその後、人類は2度の世界大戦を経験し、そして冷戦を経て、それまでとは全く異なった状況に直面している。

格差が増大し、それが200年前と同様になったということは、私たちが再度グローバル化をはじめとする、諸々の現象に考察を加えることを要求している。新たな思想を生み出す必要が生まれてきたのである。

戦後、思想も大きな転換期を迎えてきている。戦争を経験した思想家たちが

¹⁴ AFPBB NEWS WORLD BIZ 「世界の貧困の格差が拡大、1820年代の水準にまで悪化 OECD」
<http://www.afpbb.com/articles/-/3028048> (閲覧日:11月28日)

著述した、責任という概念は、大変興味深いものである。むしろ、この概念は、自由や幸福といった、倫理的諸概念に埋没していただけなのかもしれない。このような概念は、確かに有史上語られていたのである。

多でありながら、一へと向かう可能性がある。このような考えは、宗教思想において顕著にみられる。人々は様々な生活を営んでいるが、何らかのものによって、ある結びつきをもっている。

体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。¹⁵

だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。

目が手に向かって「お前は要らない」と言えず、また、頭が足に向かって「お前は要らない」とも言えません。¹⁶

使徒パウロによれば、人間は一人ひとり役割をもっている。そして、それぞれに適した機能を有している。それはどれも不要とは言えず、またどれも固有である。

これは人間が、その役割を果たすべく責任を有していることを明かしている。個人の側からみれば、それは使命とも表現できよう。自分は何をしたら良いのかということは、各自周りの状況を見ないとわからない。落ちていた物を拾おうとしている時、足が動かなかったどうなるか、手が動かなかったらどうなるか。どちらの場合にせよ、目的を達成することはできない。各々が個別の機能を有しているのであれば、相互に協力しなければならないのである。

人間個人の間を関係を考えるならば、それは他者への気遣いが大前提になる。責任があると考えたとしても、他者への気遣いがなければ、一人よがりにはか過ぎない。

コリント書におけるパウロの言明は、イエス・キリストから、私たちの行為の指針を示している。つまり、他者と共にあるという倫理によって、人間が一つになるということが可能になる。キリストの体という概念が達成されうるとしたら、責任=倫理ということ私たちは考えねばならないだろう。テイヤー・ド・シャルダンが言うように、意識を有するものとして。

以上のように、私の研究は、レヴィナスという思想家やキリスト教の思想から、今まで埋没していた責任という思想を探求し、真に自由な人間とは何か、ということ考察することである。

¹⁵ 一コリ 12・12。

¹⁶ 一コリ 12・20-21。

<参考文献>

- ピエール・テイヤール・ド・シャルダン『現象としての人間』〔新版〕美田稔訳、2011年、みすず書房。
- 『テイヤール・ド・シャルダン著作集 7 人間の未来』伊藤晃、渡辺義愛訳、みすず書房、1969年。
- テイヤール・ド・シャルダン『愛について』山崎庸一郎訳、みすず書房、1974年。
- E. Lévinas, *Totalité et Infini*, Kluwer 1992.
- E・レヴィナス『全体性と無限(上)』熊野純彦訳、岩波書店、2005年。
- E・レヴィナス『全体性と無限(下)』熊野純彦訳、岩波書店、2006年。
- E・レヴィナス『倫理と無限-フィリップ・ネモとの対話』西山雄二訳、筑摩書房、2010年。
- F・カフカ『城』前田敬作訳、新潮社、1971年。
- 『思想読本〔8〕グローバリゼーション』伊豫谷登士翁編、作品社、1992年。
- ノーム・チョムスキー、デイヴィッド・バーサミン著『グローバリズムは世界を破壊する-プロパガンダと民意』藤田真利子訳、明石書店、2003年。
- H・アーレント『全体主義の起原 3-全体主義』大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、1974年。
- H・アーレント『イェルサレムのアイヒマン-悪の陳腐さについての報告』大久保和郎訳、みすず書房、1969年。
- G・W・F・ヘーゲル『精神哲学-哲学の集大成・要綱 第三部』長谷川宏訳、作品社、2006年。
- 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳-旧約聖書続編つき』、日本聖書協会、1987年。